

駿河國沼津の西
北一里餘にある。
東海道中の一驛。
駿河國にある。

秋風あきかぜにほころび
ぬらし藤袴ふじばこつづ
りさせてふきり
ざりす鳴く（古今集）
猛たけの刈る露つゆにす
む糸いとのわれから
と香かほをこそな
め世よをば恨うらみじ
（古今集）

越前吉田郡曹野
禪の本山。

坐禪ざぜんの僧そうの指さし氣き
睡眠すいみんを替かむる局きょく
平長方形へいぢやうけいの棒ぼう。
禪宗ぜんしゆでは風經ふうけい
（フギ）念經ねんけい
（ネンキン）とい
ふ。

一〇 敵討

菊池 寛

越えちの御山ごさん永平寺えいへいじにも爽さわかな初夏しゆげが來た。冬の間、日毎の雪搔ゆきをかき作業さぎょうに、雲水うんすい達だつを苦しめた雪も、深い溪間せきまからさへ、その跡あとを絶たつてしまつた。十幾棟じゆけいどうの大伽藍だいがらんを圍かこんで、蟲々むしむしと天あまを摩さしてゐる老杉らうさげに交まじつて、枅たけや櫓やぐらが薄緑はくろくの水々みづみづしい芽こゝろを吹ふき始めた。山櫻さんおうは散り果ちつてしまつたが、野生やせいの藤ふじが樹々じゆじゆの下枝したえだに絡かみながら、ほのかな紫むらさの花房はなぼうをゆたかに垂たれてゐる。惟念しんねんにも僧堂そうどうの生活せいかつが漸しだく慣なれて來た。當初だんしゆの頃の坐禪ざぜんや作業さぎょうの苦くるしさが、今では夢ゆめのやうに淡たんく薄はくれてしまつた。曉天せうてんの坐禪ざぜんにとろ／＼と眠ねつて、警策けいさくに夢驚ゆめおどかされることも數少かずすくくなつた。正丑せいしゆの刻ときの振鈴しんねいに、床とこを蹴ふつて起た上あることも、餘あまり苦痛くるつうではなくなつた。午前まへひ午後ごごの作業さぎょう、日中ひちゆうの誦經じゆけい、看經くわんけい、初夜しゆやの坐禪ざぜんも、日常にちじやうの生活せいかつになつてしまつた。去年こぞの霜月しもづき入いつたのであるから、此のお山での修業しゆぎやうはまだ半年

に及んだばかりであつたけれども、惟念の念頭からは、諸々の妄念が洗はるゝ如くに消えて行つた。心事は元より未了であつたけれども、心澄み氣直えた暁天の坐禪などには、佛性が知らず知らず増長して、かすかながらも悟道に似た閃きが心頭を去來することがあつた。

親の敵を求めて六十餘州を血眼になつて探ね歩いた過去の生活が悪夢のやうに思出される。父親を討たれた時の激怒復讐を誓つた時の悲壯な決心、それが今でもまざ／＼と思出される。が、もう實感は何もない。四五年の間は關東關西と梭のやうに駆け廻つた。が、その裡に、こんなに焦慮つても時機が來なければ討てるものではないと考へた。彼は江戸に腰を落付けて、二年ばかりゆつくりと市中を探ね歩いた。が、敵の噂をさへ聽くことが出來なかつた。彼はまた焦慮り始めた。江戸を立つて久し振りに

東海道を上つたのが元祿三年の秋で、故郷の松江を出てから八年目彼は三十の歳を迎へてゐた。畿内から中國九州と探し歩いたそれからの三年間にも、彼は敵に巡り合はなかつた。江戸を出る時に用意した百兩に近い大金も、彼が赤間が關の旅宿で風邪の氣味で床に就いた時には、二朱銀が數へるほどしか残つてゐなかつた。

彼は門附けをしながら中國筋を上つて浪花へ出るまでに半年もかゝつた。浪花表の倉屋敷で、彼は國許の母からの消息に接した。母は、自分が老衰の爲に死の近づいたことを報じて、彼が一日も早く讐を討つて歸參することを朝夕念じてゐると書いてゐた。彼は母の消息を手にして心を傷めた。十一年の間、空しく自分を待ちあぐんでゐる痛ましい母の心が、彼を悲しませた。彼は新しい感激で、大和から伊勢へ出て、伊勢から東山道を江戸へ下つた。

が敵らしいものの影をさへ見なかつた。探ねあぐんだ彼は、しよ
う事なしに奥州路を仙臺まで下つて見た。が、それも徒勞の旅で
あつた。江戸へ引返すと、碓氷嶺を越えて、信濃を経て北陸道に出
て、金澤百萬石の城下にも足を留めて見た。が、その旅も空しい辛
苦だつた。近江から京へ上つたのが、元祿九年の冬の初である。
國を出てから十四年の月日が、空しく流れてゐた。故郷の空が、矢
も楯も堪らないやうに戀ひしかつた。二十二で故郷を出た彼は、
既に初老に近かつた。母が戀ひしかつた。安易な家庭生活が戀
ひしかつた。無味單調な敵討の旅に、彼はもう飽きくしてゐた。
が、一旦敵討を志したものが、敵をえ討たないで、おめくくと歸れる
わけはなかつた。行き暮れて辻堂に寢た時とか、汚い宿に幾日も
降り籠められてゐた時などには、彼はつくづく敵討が嫌になつた。
彼はいつそ京か浪花かで町人になり下つて、國許の母を迎へて、長

閑な半生を過さうかと思つた。が、少年時代に受けた武士の
教育が、それを許さなかつた。彼は自分の武運の拙さを、しみじみ
歎じた。それと同時に自分の生涯をこれほど呪つてゐる父の敵
が恨めしかつた。彼は敵に對する憎惡を自分で振ひ起しながら、
またまた二年に近い間畿内の諸國を探し廻つた。

浪花の倉屋敷で、國許の母が死去したといふ知らせを得たのは、
彼が三十八の年である。故郷を出てから十六年目であつた。恐
しい空虚が彼の心を閉した。凡てが煙のやうに空しいことに思
はれた。千辛萬苦の裡に過した十六年目の旅が馬鹿々々しくな
つた。敵に對する憎惡も、武士の意地も、亡父に盡くす孝節も、凡て
が空しい夢のやうに消えてしまつた。

彼は間もなく、浪花に近い曹洞の末寺には入つて得度した。其
處で一年ばかりの月日を過してから雲水の旅に出て、越の御山を

志して來たのである。瞋恚の念が洗はれた惟念の心には枯淡な救の道の思しか残つてゐなかつた。長いく敵討の旅の生活が別人の生涯のやうにさへ思はれ始めた。

(二)

その日は維那和尚から採薪作業の觸が出てゐた。ほがらかな初夏の太陽が老杉の梢を洩れて、しめつぽい青苔の道にも明るい日脚がさしてゐた。

百名を越してゐる大衆に、役僧達も加はつた。皆々思ひ思ひの作業衣を着て裏山へわけ入つた。ぼろくになつた麻糸を着てゐるものもゐた。袖のない綿衣を着てゐるものもあつた。雲水達の顔が變つてゐるやうに、銘々の作業衣も變つてゐた。惟念にははじめの作業で、何となく嬉しかつた。彼は僧堂の生活に入つて以來、兩腕に漲つて來る力の過剰に苦しんでゐた。

袖夫が伐つてゐる生木を、彼は抱へきれぬほどの束にした。二十貫に近い大束を軽々と擔ぎ上げた。勾配の可なり大きい坂を駆けるやうに降りて來た。二十間ばかり勢よく走せ下つた彼は、前に行く雲水を追ひ越すわけにも行かないので速度を緩めた。その男の擔いでゐる束は、彼の束の三分一もなかつた。が、その男はその束の下で、危げに足を運んでゐる。

廣い道へ出るまでは、追ひ越すわけにはいかなかつた。彼はその男に隨いて歩いた。見るともう六十に近い老人である。同參の大衆ではなくして、役僧であることがすぐわかつた。半町ばかり後から隨いて行くうちに、彼は老僧の着て居る作業衣に氣がついた。老僧の作業衣は、その男が在俗の時に着た黒紋附の羽織らしかつた。その羽二重らしい生地が、多年の作業に色が褪せて眞赤になつてゐる。紋の所だけは墨で消したと見え、變に黒ずんで

ある。惟念はついをかしくなつて、思はず微笑を洩した。が、ふとその刹那に此の人も元は武士だつたなと思つた。彼は何氣なくその墨で黒ずんでゐる紋を見つめてゐた。それは殆ど消えかゝつてゐるけれども、丸の内に二つの鎌が並んでゐるといふ珍しい紋だつた。

惟念の全身の血が急に涌き立つた。二つの鎌が並んでゐる紋それは彼が過去十六年の敵討の旅の間夢にも忘れなかつた仇敵の紋である。父の敵は召抱へられてから間もない新参であつた爲、部屋住だつた彼は、ただ一二度顔を合はせただけである。その淡い記憶が幾年と經つ間に薄れてしまつて、他人から聞いた人相だけが唯一の手がかりであつた。その中でも敵の珍しい紋所と、父が敵の右の顎に與へてある筈の、無念の傷痕とが、目ぼしい證據として彼の念頭を離れなかつた。彼は前に行く武士、擦れ違ふ武

士宿り合はせた武士、さうした人々の紋所を、血走つた眼で、幾度か呪んだことだらう。

惟念は擔いでゐる薪束を抛り出して、老僧の首筋をぐいと攔んで、その顔を振り向きたい氣がした。彼の右の顎を見たかつたのである。十六年の苦しい旅の朝夕に、敵に對して懷いた呪咀と憎悪とが、むく／＼と蘇つて來た。が、すぐ彼に反省の心が動いた。一旦瞋恚の心を捨てて悟道の道にいそしんでゐるものが、敵の紋所を見たからといつて、心を擾すべきではない。それは捨て去つた筈の煩惱に再び囚はれることである。まして、廣い日本國中に二つない紋所とは限つてゐない。故郷の松江でこそ珍しい紋所でも、他國へ行けば數多い紋所であるかも知らない。實際江戸に町家住居をしてゐた時、通りがかりの若衆が、同じ定紋を附けてゐたのを見て、すはや、敵の縁者とばかり、後をつけて行つて、彼が敵

とは縁も由縁もない旗本の三男であることを突きとめたことさへある。恐らくこの老僧も彼の若衆と同じものであらう。十六年の間もがき苦しんでも邂逅し得なかつた敵に、得度した後に悟道の妨げになるやうにと、偶然遇はせるほど、天道は無慈悲なものではあるまい。若しまたそれが正眞の敵であつたとして、自分はどうしようといふのだ。僧形になつてゐる身で、人を殺すことは出来ない。一旦還俗した後僧形になつてゐる敵を討つて、めでたく歸參をしようといふのか。おめく／＼と敵を討ち得ないで出家したものが、敵が見付かつたからといつて還俗することは、その事自身に於て卑怯である。歸參の時に、一旦僧形になつた言ひわけが立つわけではない。彼はともすれば、擾れ立たうとする心をむつと抑へた。老僧が薪束を右の肩に擔いでゐる爲に右の顎の隠れてゐるこそ幸である。彼はその右の顎を見まいと思つた。丁

度その時、彼は廣い道へ出た。彼は老僧の方を振り向きもしないで、一目散に駆け抜けた。

が、天道は皮肉に働いた。午時の食事が終つて、再び作業がはじまつた時である。彼は燃え上らうとする妄念の炎を制しながら、薪束を作つてゐた。彼は不足してゐる薪を蒐めようとして周囲を見廻した。四五間彼方に生えてゐる樞の樹の向うに、伐られたその枝が堆く積まれてゐるのを見出した。樞の樹の下を潜つて、彼が向ふ側へ出た時である。今までは心付かなかつたその樹蔭に、午前の老僧が俯きながら薪を束ねてゐる。と思つた刹那、老僧は彼の足音を聞いて上半身を上げた。彼はいやでもその右の顎を見ずには居られなかつた。傷が古い爲に、色こそ褪せてゐたが、右の口元から顎へかけて、かすつた太刀先がありありと残つてゐる。

「おのれ、口許までそんな言葉が出かゝつたが、彼の道心はそれに打勝つた。彼は一瞬の間老僧を見詰めると踵を翻して、自分の薪束の所へ歸つた。でも、彼の心は容易には収まらなかつた。彼は薪束の中の太い棒を見てゐると、それを眞向に振り翳して敵の坊主頭を叩き碎いてやりたかつた。まだ一年と修業をしてゐない彼の道心は、ともすれば崩れかけた。彼は足下の薪束を茫然と見詰めながら迷つた。迷つた末に、彼は辛うじて自分の妄執に打勝つた。

が、自分の心が不安でならなかつた。一旦は思ひ捨てても、どういふ機會に再び妄念に囚はれるかも知れない。どんなはづみで對手を打殺すかも知れない。彼は自分の道心の勝利を何かに誓つて置きたかつた。二度と再び、未練な妄執に囚はれない爲に、何かに誓つて置きたかつた。

それは敵の老僧に打開けて置くよりいゝことはないと考えへつた。在俗の折の妄執として話して置かう。現在の自分がそれに打勝ち得たことを對手に話して置かう。そして敵と手を執つて快く笑はう。敵にそれと明した以上、どんなに妄執の力が強くとも、束ねた言葉を破ることはないだらう。彼はさう思ふと、出来上つた薪束を脍せた肩に擔ぎ上げて歩み去らうとする老僧を呼び止めた。

「何御用。」

彼は敵の言葉を始めて耳にしたのである。又亂れようとする心を抑へた。

「貴僧に訊きたいことがある。」

「何ぢや。」

老僧は落着き返つてゐる。

「餘の儀でない。貴僧はもと雲州松江の藩中にて、鳥飼八太夫とは申されなかつたか。」

老僧の顔色は動いた。が言葉は爽やかであつた。

「御言葉の通りぢや。」

「然らば重ねて尋ね申す。貴僧は松江におはした時、同家中の山村武兵衛を討つた覚えがござらうな。」

さすがに老僧の顔色は變つた。が言葉は尙神妙であつた。

「なか／＼。して、其處もとは何人におはすのぢや。」

老僧は可なりせきこんだ。惟念は努めて微笑をさへ浮べながらいつた。

「愚僧は今申した山村武兵衛の倅、同苗武太郎と申したものぢや。御身を敵としては付け狙つて、日本國中を遍歴いたすこと十餘年に及んだが、武運拙くして遭はざることは是非なしと諦め、斯や

うの姿になり申したのぢや。」

老僧は老眼をしばたゝいた。

「近頃神妙に存ずる。愚僧は今迄申した通りのものぢや。御自分の父を討つて、松江表を立退き、其の後諸國にて身上を稼ぎ申したが、人を殺した報は靦面ぢや。何處にてもありつく方なく、是非なく出家いたしたのぢや。こゝで御身に廻り合ふのは天運の定まる所ぢや。僧形なれども仔細はござらぬ。存分にお討ちなされい。」

老僧の言葉は清々しかつた。惟念は淋しい微笑を浮べた。

「討つ討たるゝは在俗の折のことぢや。互に出家沙門の身になつて、今更何の意趣が残り申さうぞ。ただ御身に隔意なきやうにと、かくは打明け申したのぢや。敵を討つ所存などは毛頭ござらぬわ。」

老僧は折返していつた。

「いや、さやうではござらぬぞ。こゝは御自分よく、覺悟あるべき所ぢや。われらは身上の有りつきなき爲の是非なき出家ぢや。御自分は違ふ。我らを討ち申されて歸參なさるれば、本領安堵は疑ない所ぢや。その上、我等を赦して修業を續けられようとも、現在親の敵を眼前に置いては、所詮は悟道の妨ぢや、妄執の源ぢや。内親自省の工夫を積んでも無益な事ぢや。在俗の折ならば、なか、討たれ申す我らではないが、かやうの姿なれば、手向ひは仕らぬ。早々お討ちなされい。」

老僧の言葉は道理至極した。惟念は老僧を討たうといふ烈しい誘惑を刹那に感じた。が、それにも漸くにして打勝つた。

「は、は、は、何を申さるゝのぢや。此の期に及んで、武儀の頓着は一切無用ぢや。愚僧はもはや分別をきめ申した。御身を敵

と思ふ妄念は一切断ち申す。もし、貴僧にお志あらば亡父の後生菩提をお弔ひ下されい。」

彼はさう潔くいひ放つと、兩手にも餘る薪束を輕々と擔ぎ上げて、御堂の倉庫を指して一散に駆け下つた。

(三)

日中の作業のために、その夜は夜坐各寮の觸があつた。それは夜の坐禪の休止を意味してゐた。が、惟念にはその夜は大事の一夜であつたから、自分一人坐禪の座に着いた。

附近の雲水達が相集まつて法螺を吹いてゐるのも耳にかけず、坐禪三昧に心を浸した。いかに出家の身であるとはいへ、眼前に在る父の敵を赦したといふことが、執拗な悔恨となつて心頭を去來したが、それがいつの間にか薄れてしまふと、神々しい薄明が、心の裡をほのかに照らすやうな心持がした。初更の來たことを報

一卷。道元禪師
撰。
道元禪師。

ずる太鼓の音とともに、いつもは大衆と共に朗讀する。普勸坐禪儀を口の裡で唱へた。高祖開闢の靈場で、高祖の心血の御作たる坐禪儀を拜誦する有り難さが、彼の心身にひし／＼と沁み渡つた。就眠の板の音を合圖に、坐禪の膝を崩すまで彼の心は初夏の夜の空のやうに澄み渡つて、一片の妄念さへ痕を留めてゐなかつた。烈しい日中の作業の疲れに、多くの雲水達は、函櫃から蒲團を取出して、それに包まれると間もなく、一齊に寢入つてしまつたのだらう、十四間四面の廣い僧堂の彼處からも、此處からも安らかな聲が、高く聞えて來たが、惟念には晝間の疲れにも拘らず、眠はなかなか來なかつた。坐禪の爲に澄み切つた心が、いつまでも續いた。が、子の刻が近づくといとろ／＼した。彼は夜半何事となくふと覺めた。宵から右の肩を下にし續けてゐた爲だらう、右半身が痺れたやうに痛んだ。彼は寢反りを打

たうとした。が、不思議に彼の身體は動かなかつた。彼は眼を開いた。彼は自分の顔の上に朧げながら人の顔を見た。聖龕の前の燈明の光しかない、ほの暗い堂内では、それが何人であるか、容易にはわからなかつた。が、對手は彼が目覺めたのを知ると明らかに狼狽した。

彼はその狼狽によつて、對手が晝間の老僧であることを知つた。それと同時に、その老僧の右の手に磨ぎすまされた剃刀が、ほの白く光つてゐるのを見た。が、彼にはそれを防がうといふ氣もなかつた。向うから害心を挟んで來たのを機會に、對手を討ち取らうといふ心も起らなかつた。ただ赦し盡くしてゐるのに、それを疑つて自分を害さうと企てた對手を憫む心だけが動いた。が、それもすぐ消えた。彼には右半身の痺れだけが感ぜられた。「愚僧は宵より右肩を下につけて痺れ申す。寢反りをゆるされ

ら、

彼は口の裡でつぶやくやうに言ひながら、狭い五布の蒲團の中でくるりと向きを變へた。夢とも現ともない瞬間の後に、彼は再び深い眠に落ちてゐた。

翌日の一人が永平寺を逐電したのは、その翌日である。

*一 名は駮。馬琴はその號。近世小説の大家。嘉永元年歿。年八十二。

*二 オオキニ 禍之興、禍、何異、科様（漢書）

*三 人間萬事塞翁馬。推枕軒中聽雨眠。（元信齋時國）

*四 禍兮福之所倚。福兮禍之所伏。孰知其極。（老子）

* 下總國にある。